

ネヘミヤ記7章「神の民の守り堅め」

1A 町の警備 1-4

2A 帰還民の系図 5-68

1B 神の示し 5

2B イスラエルの民 6-38

3B 祭司とレビ人 39-45

4B 宮しもべとソロモンのしもべ 46-60

5B 血統の証明されない人々 61-65

6B 総計 66-68

3A 礼拝への準備 69-72

本文

ネヘミヤ記7章を開いてください。私たちは、ユダヤ人たちが城壁の工事を五十二日間で完成させたところを読みました。その後の話が7章以降に書かれています。城壁が建てられたから、それで完成したのではありません。大事なのは完成したものを、如何に保持していくかであります。ネヘミヤ記のテーマ、「神の民の守り堅め」であります。その固めることについて学んでいきます。

1A 町の警備 1-4

1 城壁が築き直され、私が扉を取り付けたとき、門衛、歌い手、レビ人が任命された。

城壁のとびらが取り付けられた時に、門衛と歌うたいとレビ人が任命されています。おそらく、この任命はエズラなど、祭司たちが行ったのでしょう。彼らは、レビ人は、神殿の門において門衛や歌うたいとして奉仕していました。歴代誌第一を読むと、神殿建設にあたって、初めてレビ人にこの奉仕を任命します。門衛は、聖所に入るイスラエル人を守り、そうでない人たちを入れさせない役目を果たします。歌うたいは、神殿の中に主への賛美が絶えまなく捧げられているようにしています。エルサレムの町の城壁が再建された今、この礼拝がまず回復されるべくネヘミヤはとりかかったのです。礼拝生活の確立とその堅持です。

ネヘミヤは総督であり、政治的指導者です。しかし、エルサレムがエルサレムたらしめているのは、神殿があるからであり、神の礼拝があつてこそそのエルサレムであることを知っていました。それは政治的な問題、周囲の外敵に対する霊的な防御であることも知っていたことでしょう。かつて、ユダ王国の王ヨシャファテが圧倒的に優位な数の敵と対決する時に、レビ人を最前線に出して神に賛美をさせました。すると敵が混乱したのです。(Ⅱ歴代 20:20-22) 賛美には力があります。

そしてエルサレムにおいて門は靈的なものであることを知ります。門が開いているか閉じているかは、神の都に入れるか入れないかを示していて、都の中にいることは救いそのものをしめしていました。御国に入る約束を、イエス様はフィラデルフィアにある教会に対して、「戸を開いておく」と言われたのです。「黙 3:8 わたしはあなたの行いを知っている。見よ。わたしは、だれも閉じることができない門を、あなたの前に開いておいた。あなたには少しばかりの力があって、わたしのとばを守り、わたしの名を否まなかったからである。」終わりの日に、私たちは天からのエルサレムを待ち望んでいます。天のエルサレムにおいては、十二の門があり、そこには御使いが立っていました(黙示 21:12)。その都全体が聖なるものであり、外と内を区別するものでありました。

2 私は兄弟ハナニとこの城の長ハナンヤに、エルサレムを治めるように命じた。これは、ハナンヤが誠実な人であり、多くの人にまさって神を恐れていたからであった。

ネヘミヤが兄弟のハナニだけでなく、この城の長ハナンヤにエルサレムを治めさせています。その理由が、彼が誠実であり、神を恐れているからというものです。誠実というのは、忠実だということです。神の家、いや地上の家においてもそうですが、この二つの資質が治めることのできるものです。忠実な人です。能力がある人ではなく、自分に与えられた能力を、どんな小さなことであっても誠実に、忠実に用いて、主に仕えているかどうかにかかっています。「I コリ 4:1-2 人は私たちがキリストのしもべ、神の奥義の管理者と考えるべきです。その場合、管理者に要求されることは、忠実だと認められることです。」それから、神を恐れることです。人がどう見ているのか、人をどのように喜ばせるのか、ではなく、神になんと言われているのか、神が命じておられることを自分が行っているのか、また人が見ていなくとも、悪から身を避けているか、という資質が問われます。モーセが自分を補佐する長を選ぶ時に、こういう条件でした。「出 18:21 あなたはまた、民全体の中から、神を恐れる、力のある人たち、不正の利を憎む誠実な人たちを見つけ、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長として民の上に立てなさい。」

3 私は彼らに言った。「太陽が高く昇って暑くなるまでは、エルサレムの門を開けてはならない。そして彼らが警備に立っている間に、門をしっかりと閉じておきなさい。エルサレムの住民を、それぞれ物見のやぐらか自分の家の前に、見張りとして立てなさい。」

ネヘミヤは、外からの敵に対する警戒を緩めていません。城壁ができたから安心ではないのです。まず彼は、兄弟ハナニと、エルサレムの町のつかさハナンヤにエルサレムを治めるように命じ、彼らが朝早く門を開けることのないように、さらにイスラエル人が警護をしている間に門を閉じなさいと言いつけました。警護は、工事をしている時と基本的に同じで、エルサレムの住民が行い、自分の家の前に見張りを立てさせました。すべての者たちがそれぞれの場で警護に当たります。

私たち神の聖徒たちは、靈の戦いにおいて勝利するだけでなく、その勝利を保持する戦いの中

にいます。パウロはこれを、「堅く立つ」という言葉で言い表しています。「エペ6:13-14 ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、一切を成し遂げて堅く立つことができるように、神のすべての武具を取りなさい。そして、堅く立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、…」そして私たちは、イエス・キリストの福音をしっかりと保ち、守る義務があります。「Ⅱテモ1:13-14 あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛のうちに、私から聞いた健全なことばを手本にしなさい。自分に委ねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい。」せっかく、福音によって、神の力によって救われたのに、その福音を死守することからいつの間にか離れていき、他のことを行なっている、ということがしばしば起こります。福音から離れさせようとする力が、ものすごく強く起こります。その敵の策略は巧妙であります、私たちのすることは単純です。頑固に福音の教えの中に立つことです。初めに与えられた確信を、忍耐をもって保つことです。

4 この町は広々としていて大きかったが、その中の住民は少なく、家もまだ十分に建てられていなかった。

ここにネヘミヤは、大きな課題を見つけました。エルサレムの町に住民が少ないことです。家が建てられていないことです。主を礼拝することを第一とした城の中に住む人々がどうしても必要です。ネヘミヤは、11章にて民の十分の一をエルサレムに住ませ、また自発的に住む者たちを歓迎しています。(1-2節)

2A 帰還民の系図 5-68

このことを行う前に、ネヘミヤは、初めに帰還した民の系図を見つけます。そして、11章で今の帰還民の系図を作ります。7章には、エズラ記2章にもある、初めに帰還した民の系図を発見して、それを書き記すところから始めます。

1B 神の示し 5

5 私の神は私の心に示して、私に有力者たちや、代表者たちや、民衆を集めて、彼らの系図を記載させた。私は最初に乗って来た人々の系図を発見し、その中に次のように書かれているのを見つけた。

神がネヘミヤの心を動かして、そうさせたとあります。旧約聖書では、系図が非常に重んじられています。それは創世記3章15節の、「女の子孫」の預言があるからです。ユダヤ人にはメシアを輩出する大きな使命がありました。また彼ら自身が、アブラハムに与えられた契約によって、契約の民であることを確認する使命がありました。ですから、系図を残すということは、信仰の継承そのものであったのです。そしてその子孫にキリストが生まれました。今は、その子羊のいのちの書に、私たちの名が書き記されているかが最も大きな課題です。イエス様は、悪霊が追い出されることよりも、天に名が書き記されていることを喜びなさいと言われました。また黙示録にはこうあ

ります。「黙 13:8 地に住む者たちで、世界の基が据えられたときから、屠られた子羊のいのちの書にその名が書き記されていない者はみな、この獣を拝むようになる。」そして、贖いの日のために聖霊の証印を押されていることを確認する必要があります。「エペ 1:13-14 このキリストにあって、あなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞いてそれを信じたことにより、約束の聖霊によって証印を押されました。聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。このことは、私たちが贖われて神のものとなされ、神の栄光がほめたたえられるためです。」

2B イスラエルの民 6-38

6 バビロンの王ネブカドネツアルが引いて行った捕囚の民で、その捕囚の身から解かれてエルサレムとユダに上り、それぞれ自分の町に帰ったこの州の人々は次のとおりである。7 彼らは、ゼルバベル、ヨシュア、ネヘミヤ、アザルヤ、ラアムヤ、ナハマニ、モルデカイ、ビルシャン、ミスペレテ、ビグワイ、ネフム、バアナと一緒に帰って来た。イスラエルの民の人数は次のとおりである。

私たちは、エズラ記 2 章において帰還民の系図を読みました。キュロス王の布告によって、総督ゼルバベル率いる帰還民が、到着後に彼らが確かに、アブラハムの子孫、ユダヤ人なのだという証明のための記録でした。その時から 90 数年経っているのですが、この同じ記録を 7 節からこの章の最後まで書かれています。そして今のユダヤ人が確かに、この系図の中にいる者たちであることを確認したのです。エズラ記 2 章とネヘミヤ記 7 章の系図は、多少のずれがあります。人数や人の名前が少しずれています。けれども、そこで途中で名前は判明したであるとか、北イスラエルの十部族の人々が加えられたであるとか、古代の文献ではそうした修正がなされたという但し書きなく行われるので、大きな問題ではありません。

初めに、7 節でゼルバベルと十一人の指導者の名が書かれています。イスラエル十二部族を代表しているのでしょう。ここのネヘミヤは、90 年上の前の系図なのでここのネヘミヤとは違います。

8 パルオシュ族、二千百七十二人。9 シェファテヤ族、三百七十二人。10 アラフ族、六百五十二人。11 ヨシュアとヨアブの二族からなるパハテ・モアブ族、二千八百十八人。12 エラム族、一千二百五十四人。13 ザト族、八百四十五人。14 ザカイ族、七百六十人。15 ビヌイ族、六百四十八人。16 ベバイ族、六百二十八人。17 アズガデ族、二千三百二十二人。18 アドニカム族、六百六十七人。19 ビグワイ族、二千六十七人。20 アディン族、六百五十五人。21 ヒゼキヤ族、すなわちアテル族、九十八人。22 ハシュム族、三百二十八人。23 ベツアイ族、三百二十四人。24 ハリフ族、百十二人。25 ギブオン族、九十五人。

氏族ごとの人数です。次からは町に住む住民による人数です。

26 ベツレヘムとネトファの人々、百八十八人。27 アナトテの人々、百二十八人。28 ベテ・アズマ

ウエテの人々、四十二人。29 キルヤテ・エアリムとケフィラとベエロテの人々、七百四十三人。30 ラマとゲバの人々、六百二十一人。31 ミクマスの人々、百二十二人。32 ベテルとアイの人々、百二十三人。33 別のネボの人々、五十二人。34 別のエラム族、一千二百五十四人。35 ハリム族、三百二十人。36 エリコ人、三百四十五人。37 ロデ人とハディデ人とオノ人、七百二十一人。38 セナア人、三千九百三十人。

セナア族が際立って多いですね、3930 人です。

3B 祭司とレビ人 39-45

39 祭司は、ヨシュアの家系のエダヤ族、九百七十三人。40 イメル族、一千五十二人。41 パシユフル族、一千二百四十七人。42 ハリム族、一千七十七人。

祭司の系図です。アロンの直系が神殿の中で祭司の務めを果たします。

43 レビ人は、ホダウヤ族のヨシュアとカデミエルの二族、七十四人。44 歌い手は、アサフ族、百四十八人。45 門衛は、シャルム族、アテル族、タルモン族、アクブ族、ハティタ族、ショバイ族、百三十八人。

レビ人は、荒野の旅の時は幕屋の運搬の奉仕をしていましたが、エルサレムに礼拝が固定された今、門衛によって礼拝者の出入りを見張り、また主に賛美を献げる礼拝者となります。

4B 宮しもべとソロモンのしもべ 46-60

46 宮のしもべは、ツイハ族、ハスファ族、タバオテ族、47 ケロス族、シア族、パドン族、48 レバナ族、ハガバ族、シャルマイ族、49 ハナン族、ギデル族、ガハル族、50 レアヤ族、レツイン族、ネコダ族、51 ガザム族、ウザ族、パセアハ族、52 ベサイ族、メウニム族、ネフィシェシム族、53 バクブク族、ハクファ族、ハルフル族、54 バツリテ族、メヒダ族、ハルシャ族、55 バルコス族、シセラ族、テマフ族、56 ネットリア族、ハティファ族。

「宮のしもべ」は、イスラエル人が戦って捕虜として連れてきた者たち、あるいはギブオン人であると考えられています。ギブオン人は、主の宮において、水を汲み、たきぎを割る者たちとして、ヨシュアの時に定められた者たちです。サウルの時代、サウルが彼らを殺したということで、ダビデがその責任を問われて、サウル家の子供を殺さなければならなかった事件さえあります(Ⅱサム21章)。ヨシュアの時の誓いがこのようにずっと守られているし、また彼らが、ある意味で主なる神を信じる者たちとして、異邦人であるのに守られている証拠でもあります。レビ人が行う奉仕で、このような肉体労働を使役された者たちと考えられます。

57 ソロモンのしもべたちの子孫は、ソタイ族、ソフェレテ族、ペリダ族、58 ヤアラ族、ダルコン族、ギデル族、59 シェファテヤ族、ハティル族、ポケレテ・ハツェバウム族、アモン族。60 宮のしもべたちと、ソロモンのしもべたちの子孫は、合計三百九十二人。

ソロモンが神殿を建てる時に呼ばれたツロの技術者であるとか、その時からの子孫であると考えられます。

5B 血統の証明されない人々 61-65

61 次の人々はテル・メラフ、テル・ハルシャ、ケルブ、アドン、イメルから引き揚げて来たが、自分たちの先祖の家系と血統がイスラエル人であったかどうかを証明できなかった。62 デラヤ族、トビヤ族、ネコダ族、六百四十二人。63 祭司の中では、ホバヤ族、ハ・コツ族、バルジライ族。このバルジライは、ギルアデ人バルジライの娘の一人を妻にしたので、その名で呼ばれていた。64 これらの人々は自分たちの系図書きを捜してみたが、見つからなかったもので、彼らは祭司職を果たす資格がない者とされた。65 そのため総督は彼らに、ウリムとトンミムを使える祭司が起こるまでは、最も聖なるものを食べてはならないと命じた。

アロン系であることの証明ができず、祭司の務めはできない者たちの名前です。これは大事ですね、いつの間にかその人たちの息子や孫がネヘミヤの時代に祭司をしてしまうかもしれませんから、はっきりさせるべきです。

6B 総計 66-68

66 全会衆の合計は四万二千三百六十人であった。67 このほかに、彼らの男女の奴隷が七千三百三十七人いた。また、彼らには男女の歌い手が二百四十五人いた。68 らくだは四百三十五頭。ろばは六千七百二十頭であった。

全集団の合計が書かれています。4万2千360名ですが、その他の男女の奴隷がおり、また歌うたいもいます。

3A 礼拝への準備 69-72

69 一族のかしらの何人かは、工事のためにささげ物をした。総督は資金として金一千ダリク、鉢五十、祭司の長服五百三十着を献げ、70 また、一族のかしらのある者は、工事資金として金二万ダリク、銀二千二百ミナを献げた。71 そのほかの民の献げたものは、金二万ダリク、銀二千ミナ、祭司の長服六十七着であった。

ここでは、ネヘミヤを始めとして有力者たちが捧げた資金の額が書き記されています。城壁の工事は終わっていますが、その他の工事、また神殿のために必要な資金のことでしょう。一ダリクは、

金貨の単位で8.5gですが、8.5キロ分の重量です。相当の額ですね。そして祭司の長服もかなりの費用が必要です、お金もそうですが現物支給もしています。

72 こうして、祭司、レビ人、門衛、歌い手、民のある者たち、宮のしもべたちが、すなわち、全イスラエルが自分たちの元の町々に住んだ。イスラエルの子らは自分たちの町々にいたが、第七の月が来たとき、(8:1 民全体が、一斉に水の門の前の広場に集まって来た。)

エズラ 2 章に書かれていた系図をそのままつなげて、自分たちの話にしています。第一次帰還民がそれぞれの、バビロン捕囚の前にいた自分たちの町に帰りましたが、それから第七の月が近づいて集まり、モーセの律法に書かれているとおり祭壇に全焼のいけにえを捧げた、とエズラ記 3 章の初めに書かれています。そして今、ネヘミヤの時代に同じように今、城壁再建の工事が終わってそれぞれの町に戻ったけれども、同じように第七の月になったらエルサレムに集まってきました。工事が終わったのがエルルの月の二十五日で9月20日頃で、第七の月は十日後です。

イスラエルの民は、系図を大事にします。荒野の旅で、これから約束の地にシナイ山から向かおうとした時も、民数記にあるように人口調査をしました。それぞれが、神に属していることを確認して進むのです。これからエルサレムの町づくりをするにあたって、系図の整理をします。私たちは、子羊のいのちの書に記されているということを、聖霊によって確認してそれで、礼拝する民として連なっています。